

群 教 セ	I 101 - 01
	平 19. 239 集

# 特別な支援が必要な児童への 通常の学級における分かりやすい授業の工夫

— 認知処理様式に着目した支援を取り入れて —

長期研修Ⅱ研修員 高橋 美保

## 《研究の概要》

本研究は、通常の学級に在籍する特別な支援が必要な児童に対して、国語科・算数科において分かりやすい授業を行うために、個々の児童に「個別の指導計画」を作成し、それぞれがもつ認知処理の特性に着目した支援を取り入れて授業実践を行ったものである。認知処理様式から考えた授業構成の4つの視点をもとに支援を工夫したことにより、特別な支援が必要な児童は、落ち着いて学習に参加したり、意欲的に取り組んだりした。

**キーワード** 【特別支援教育 認知処理様式 個別の指導計画】

## I 主題設定の理由

学校教育法等の一部を改正する法律が、平成19年4月1日より施行され、通常の学級に在籍する発達障害の児童生徒を含め、障害のある児童生徒に対してその一人一人の教育的ニーズを把握し、適切な教育的支援を行う「特別支援教育」が全面実施された。そこで、小・中学校においては特別支援学級等の担当者だけでなく、通常の学級担任を含めたすべての教師が特別支援教育に携わることになった。

通常の学級で特別支援教育が行われるようになった今、教師には“特別支援教育に対応できる指導力”が必要とされている。特別な支援が必要な児童生徒も含めた学級の児童生徒に、「確かな学力」を保障することが教師の使命であり、特別な支援が必要な児童生徒にとって分かりやすい授業ができる力を、“特別支援教育に対応できる指導力”であると考えます。

私たち教師は、どの児童生徒にも分かる授業を目指して授業を構成し、工夫している。しかし、今、学校を見渡すと、これまで行ってきた指導方法だけでは学習内容が理解できずに困っている児童生徒が各学級に数名はいるようである。例えば、耳からの情報をうまく処理できず、言葉による説明が理解しにくい児童生徒や、周りの刺激に過敏に反応して授業に落ち着いて取り組めない児童生徒、学習課題がつかめず次に何をしたらよいか分からないでいる児童生徒などである。これらの児童生徒は、注意の集中や情報の処理などの認知処

理過程に特有の困難さをもっている可能性があり、これまでの一斉指導に対して困難さを感じていると言える。

そこで、通常の学級に在籍している特別な支援が必要な児童の特性を把握して、個別の指導計画を作成し、個々の認知処理様式に着目した支援を取り入れることによって分かりやすい授業を展開したいと考え、本主題を設定した。

## II 研究のねらい

通常の学級における国語科と算数科の授業において、特別な支援が必要な児童に分かりやすい授業を行うために、個々の特性を考慮し認知処理様式に着目した支援を取り入れることが有効であることを、授業実践を通して明らかにする。

## III 研究の見通し

- 1 特別な支援が必要な児童について、個別の指導計画を作成することにより、個々の能力、認知処理などの特性を把握でき、長期目標や支援の方針を導き出せるであろう。
- 2 個別の指導計画の支援の方針をもとに、認知処理様式に着目した支援を工夫し、授業に取り入れることによって、特別な支援が必要な児童は、落ち着いて授業に参加したり、少しでも分かったという満足感を得たりできるであろう。

#### IV 研究計画(授業計画)

月	実践的研究の過程
4	○協力校における児童の実態把握 ○研究課題の設定
5	○研究推進計画の作成 ○協力校職員アンケート調査
6	○研究の構想 研究主題、研究目標等の設定
7	○第1回授業実践(国語)・授業評価
9	○第2回授業実践(算数)・授業評価
10	○第3回授業実践(算数)・授業評価
11	○第4回授業実践(国語)・授業評価
12～3	○研究のまとめと評価

#### V 研究の内容

##### 1 授業を構成するにあたっての4つの視点

これからの通常の学級における学習指導では、特別な支援が必要な児童への個別支援を工夫した分かりやすい授業を行うことが求められる。授業を構成するには、児童の教育的ニーズに応じて、きめ細かな学習指導が行えるように、児童一人一人の指導目標や指導内容・方法などを盛り込んだ「個別の指導計画」を作成し、それを授業に活用していくことが必要であると考えます。

学級全体の児童を見渡すと、学習全般にわたって遅れのある児童や、情報を処理する力に特有の困難さがあるため、特定の教科に学習の遅れが見られる児童などがある。通常、学習全般に遅れのある児童には、つまづいた学年に戻り繰り返しの学習指導、スモールステップの指導を中心に行っている。しかし、情報を処理する力に特有の困難さがある児童に対して、同じ指導方法で学力を定着させようと試みてもなかなか思うような効果が得られないことがある。なぜなら、発達に偏りがあるため、個々の特性に合った指導方法で学習指導をしていかないと、学習内容の理解が難しいからである。

例えば、児童生徒に新出漢字を習得させるためには、筆順を確認して空書きさせたり、読み方を知らせたりする。そして、数回または数行書いて練習させる。多くの児童は、その後何度も漢字を書いて覚える。繰り返しの指導である。しかし、何度漢字を書いて練習しても覚えられず、書くこ

と自体が嫌いになってしまう児童がいる。指導方法が児童の実態と合っていないのである。教師が、視点を変えて、文字の組み立てに着目した指導を行うなど、児童の情報の処理の仕方、すなわち認知処理の仕方を理解して指導を進めないと、児童には分かりにくいのである。個々の児童に合った認知処理の仕方に着目して分かりやすい授業を構成すると、学習内容を理解しやすいと考えた。

そこで、以下のように、J.P.Das の提唱した4つの認知処理様式をもとに、児童のもつ困難さから授業構成の4つの視点考えた。

##### (1) 認知処理様式

表1 (J.P.Das の提唱したPASSモデル)

認知処理様式	解 説
プランニング Planning	提示された情報に対して、効果的な解決方法を決定したり、選択したりする認知プロセスである。
注意 Attention	提示された情報に対して、不要なものには注意を向けず、必要なものに注意を向ける認知プロセスである。
同時処理 Simultaneous Cognitive Processes * 1	提示された複数の情報をその関連性に着目して全体的に処理する様式で、全体を踏まえた考え方ができる。 例：ジグソーパズルを組み合わせる。文章を読むときに、意味的な単位である単語や文章の全体をとらえる。
継次処理 Sequential Cognitive Processes * 2	提示された複数の情報を一つずつ時間的な順序によって処理する様式で、段階的な考え方ができる。 例：日本史の年号を機械的に覚えていく。文章を読むときに、一文字一文字を追って読む。

注：\* 1、2・・・Sperry と Luria の研究より、脳の認知処理には「同時処理」と「継次処理」の2つの様式がある。通常はこの2つはバランスよく発達するが、発達障害のある児童生徒には、大きな偏りが見られることが多い。

## (2) 認知処理様式から考えた授業構成の4つの視点(表2)

表れる児童の姿	困難さ	視点*	考えられる主な支援
授業中に教師の指示が伝わらず、学習課題に取り組めない。課題に集中できず注意が別のものに移る。	必要なものに注意を向けることの困難さ。	①注意集中を促す	気が散らないような学習環境を整える。学習課題に注意が向くような提示の仕方をする。 (例)興味・関心のある活動を設定する。児童の実態に合った座席配置。授業に不必要な掲示物を取り除く。板書の工夫。
最初に何をし、次に何をするか、学習の順序が組み立てられない。	学習や行動の見通しをもって対処することの困難さ。	②プランニングの力を補う	解決方法のモデルやヒントを示す。 (例)思考の手掛かりとなるワークシート、具体物、半具体物などを使った操作活動を取り入れる。
言葉だけの指示では理解しにくい。文の意味は理解できるが、読むこと、音読が難しい。	耳からの情報を処理したり、順に覚えたりすることの困難さ。短期記憶の困難さ。	③同時処理の優位性を生かす	視覚的・運動的な手掛かりを重視したり、空間的・統合的な要因を取り入れたりする。 (例)国語:絵カードを使って漢字の形を覚える。算数:筆算の仕方を色や矢印を使って理解させる。
文を読むことはできるが、書いたり意味を理解したりすることが難しい。	目から入った情報を一度に処理することの困難さ。	④継次処理の優位性を生かす	言語的・聴覚的な手掛かりや時間的・分析的な手掛かりを重視して取り入れる。 (例)国語:漢字の筆順を、音声言語を使って説明する。算数:計算手順表を用いて、繰り上がりや繰り下がりの手順に従って計算する。

\* 児童の思考の順序に合わせて、「視点」を表1のPASSモデルから表2の順に変更した。

## 2 授業の構想

特別な支援が必要な児童は、読み・書き・計算などに困難さをもつことが多いので、分かりやすい授業づくりの実践は、国語科と算数科で行うこととした。

### (1) 授業実践計画(全4回)

協力校の年間指導計画に従って4回の授業実践を行った。

### (2) 授業構成の4つの視点(表2)から考えた児童への支援を導き出すまでの流れ

児童の実態把握から支援を導き出すまでの流れを次ページの図1に示す。

### (3) 単元構想表の立案と様式の工夫

単元を構想するにあたり、特別な支援が必要な

児童に対する「ねらい」や「支援の内容」を明確にするために、単元構想表に以下の2点を加えた。

○ 「支援・指導上の留意点」に「特別な支援が必要な児童への支援」

○ 全体と対象児童の評価項目

### (4) 学習指導案の作成と様式の工夫

学習指導案を作成するにあたり、「特別な支援が必要な児童」に対して単元及び一単位時間で適切な支援を行うために、以下の3点を加えた。

○ 単元全体の「学習の方針及び配慮事項」に「特別な支援が必要な児童への配慮事項」

○ 本時における対象児童の個別のねらい

○ 全体と対象児童の評価項目

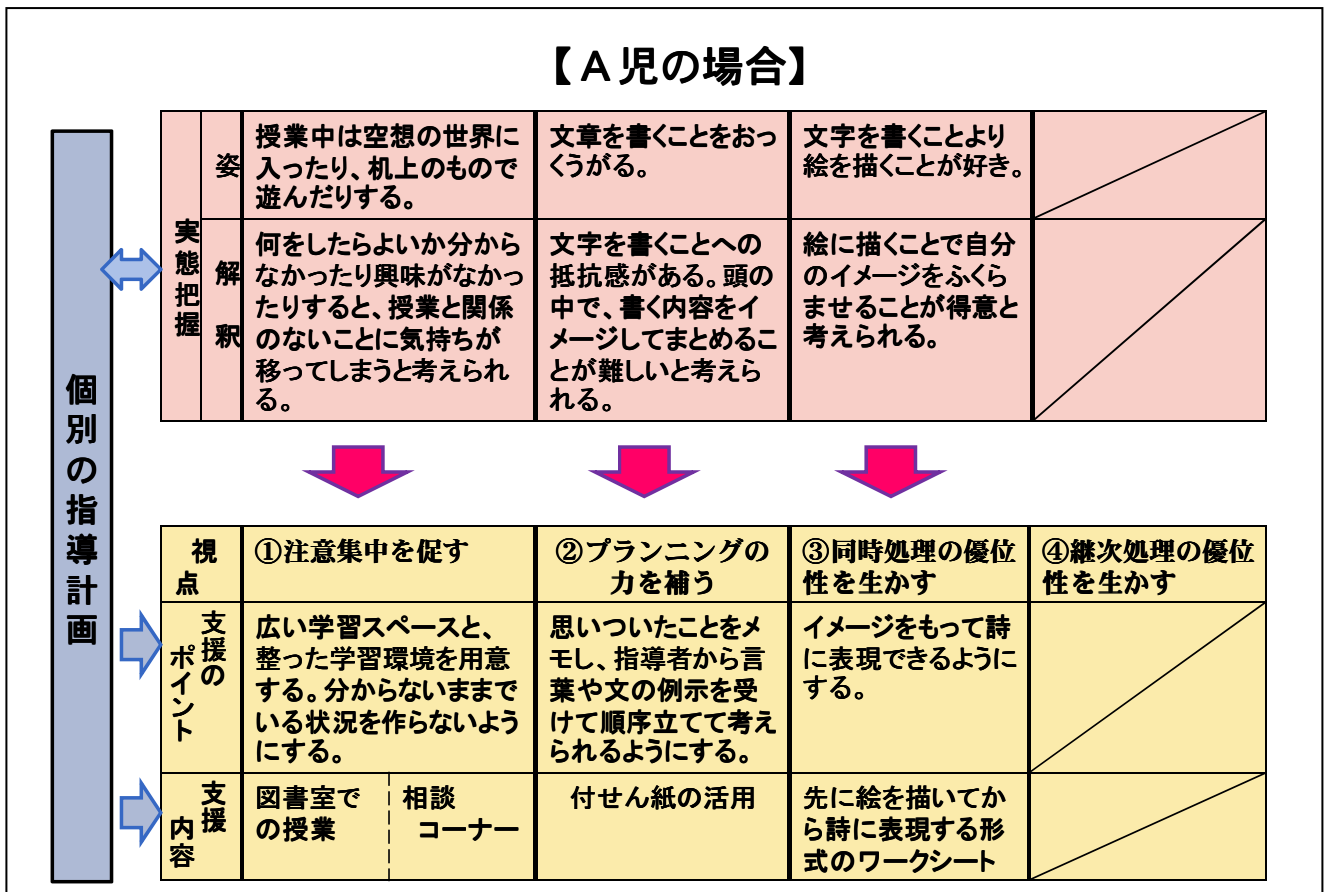


図1 児童の実態から支援を導き出すまでの流れ

### 3 授業実践

国語科、算数科において、それぞれ2単元ずつ授業実践を行った。単元全体の授業構想を立案した後、特別な支援が必要な児童の個別の指導計画をもとに、認知処理様式に着目した支援を考えて、授業を再構成した。4回の授業実践のうち第2回及び第4回について、特別な支援が必要な児童を取り上げ、実践ごとに実態及び認知特性から導き出された具体的な支援とその成果、考察について詳しく述べる。

#### (1) 算数(第2回授業実践)

「位取りが分からない。でも、色分けしたワークシートで計算手順はOK！」

ア 環境設定：広いテーブルを使い、立って具体物・半具体物を操作でき、場所を移動できるように、多目的教室を授業場所として使用した。そして、具体物・半具体物を使った「お金(模擬貨幣)のコーナー」「ブロックのコーナー」「机上で考えをまとめるコーナー」いつでも指導者と相談できる「相談コーナー」を設けた。

#### イ 本児への支援の実際

実態	○「できるようになりたい。」という気持ちが強く、板書をノートに写す作業は自分から進んでできる。 ○分からなくても「分からない」と言わず、問題は解き方が分からなくても、機械的に答えを書き込むことが多い。		
	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 33%;">○筆算の位取りの仕組みを理解できていない。</td> <td style="width: 33%;">○学級全体に出した指導者の言葉による指示が伝わらず、何をどうしてよいか分からない。 ○質問することはなく、ただ板</td> <td style="width: 33%;">○筆算形式で問題を書くときに、位取りが分からない。繰り上がりのメモを書く習慣がない。</td> </tr> </table>	○筆算の位取りの仕組みを理解できていない。	○学級全体に出した指導者の言葉による指示が伝わらず、何をどうしてよいか分からない。 ○質問することはなく、ただ板
○筆算の位取りの仕組みを理解できていない。	○学級全体に出した指導者の言葉による指示が伝わらず、何をどうしてよいか分からない。 ○質問することはなく、ただ板	○筆算形式で問題を書くときに、位取りが分からない。繰り上がりのメモを書く習慣がない。	

把 握			書を写していることが多く見られる。	○問題はいくつあっても答えは最後まで書くが、繰り上がりのある加法で解答を適当な数字で書くなど、考えて計算をしていない。
	解 釈	数字をみただけでは、位取りを分けて書くことが分からないと考える。	一斉指導の中で出した指導者の言葉による指示では、何をしたらよいか分からないと考える。	位取りや計算の手順をしっかりと理解していない。じっくり考える習慣が身に付いていないと考える。
*関連		①注意集中③同時処理	①注意集中②プランニング	②プランニング
支 援	ポ イ ン ト	筆算において位取りを意識させるためには、視覚に訴えてまず目で位を区切り、位を色分けする必要がある。	指導者の指示を伝えるには個別の対応が必要である。そこで、タイミングよく、適切なアドバイスを受けながら筆算の手順を考えやすくする環境設定をする。	自分でできると決めた問題数で、じっくりと問題に向き合い正確に答えを出す習慣を身に付けるようにする。
	内 容	まず目入り位別色分けワークシート	「相談コーナー」の設置	問題数を自分で選ぶワークシート
授 業 の 様 子		位ごとに色分けされたワークシートの中に、位を分けて数字を書けるようになった。今まで授業中は黙っていたが、一問できると「できました。」と指導者に声をかけてきた。	毎時間、自分から進んで「相談コーナー」に来て、模擬貨幣を操作しながら指導者に支援を受けると、何度もうなずきながら聞き入れ、周りの児童のアドバイスにもじっと耳を傾けていた。	解く問題の数を自分で決め、一問に時間をかけてじっくりと取り組み、繰り上がりのメモを確実に書き、正しい答えを導き出せた。今まではほとんど誤答であったが、正解の丸をもらうとうれしそうにうなずいていた。
考 察		今までは、位の区別がはっきりとつかなかったが、視覚に訴えることによって、数には位があることが理解でき位ごとに計算していけばよいことが理解できた。	静かな教室では、分からなくても「分からない。」と言えなかったが、自分から「相談コーナー」に来て指導者とやりとりしながら必要な支援が受けられ、筆算の手順が考えられた。	自分で問題を解く数を決めることで、一問にかける時間が増え、集中して問題に取り組むことができた。

\* 関連の①～④は、P. 3表2「認知処理様式から考えた授業構成の4つの視点」との関連を示す。

#### ウ 考察

##### (ア) 児童について

学級全体の児童は、指導者に声かけをしたり、友達同士で話し合ったりしながら、問題を解いていた。また、相談コーナーや前時までの学習内容をまとめた模造紙の掲示、広いテーブルの上での学習活動など、整った環境の中でリラックスして自分に合った具体物・半具体物を使って問題を解いていた。本児は、これまで教室の中で友達と話す姿はほとんど見られなかったが、本単元では、同じテーブルの児童が本児にアドバイスし、やり

とりしている場面が多く見られた。

参観者からは、次のような意見が寄せられた。

- 「まず目入り位別色分けワークシート」は本児に有効な手だてであり、位取りを色分けしたことで、今まであいまいだった位取りがはっきりと区別できた。
- 「相談コーナー」は多くの児童が毎時間利用し、だれでも気軽に指導者に質問ができ、有効なスペースであった。
- 毎時間、同じ形でワークシートを利用して学習に取り組んだため、児童は安心感があり、前

日にはできなかった筆算の手順を意識しながら学習できる児童が増え、時間を重ねるごとに筆算の手順を書けるようになった。

また、「授業評価の視点」では、本児への支援として考えた『相談コーナー』の設置「まず目入り位別色分けワークシート」「問題数を自分で選ぶワークシート」、もう一人の特別な支援が必要な児童への支援として考えた「多目的教室の使用」「見積りのプリント」は、A評価であった。

学級全体の児童からは、次のような感想があった。

- 広いテーブルでみんなと勉強できてよかった。
- いろいろなコーナーがあってよかった。
- 問題の量を自分で決めてやるのがよかった。
- 勉強が分かり、算数って楽しいなあと思った。

(イ) 授業全体について

だれでも「相談コーナー」を利用できることは、

特別な支援が必要な児童にとって、自分だけが支援されているという特別感をもたずに、学習が続けられたと考える。本単元では、毎時間パターンを決めてワークシートに学習課題をまとめたことにより、次は何をするのか指導者に聞くことなく、自分のペースに従って自主的に問題に取り組むことができた。

また、練習問題の量を自分で決めることは、計算に時間がかかる児童、計算が苦手な児童にとっては、負担感がなく問題に取り組めたと考える。特別な支援が必要な児童には、児童の実態に従って何を支援したらよいか、ねらいをはっきりさせて児童が授業に安心して取り組めるように支援を工夫することが大切である。

## (2) 国語(第4回授業実践)

「分からないと不安!でも、付せん紙とクイズ形式ワークシートで分かるよ」

### ア 本児への支援の実際

実 態 把 握		○国語は好きな教科であり、進んで挙手して発言をする。 ○授業の流れが分からないと不安になる。 ○学習が分かりたい、できるようになりたいという気持ちが強く、思いどおりに学習ができないと情緒不安になる。		
	姿	○一斉音読の途中で、読んでいるところが分からなくなったり読めない漢字が続いたりすると、不安定になる。 ○漢字は定着していないものもあるが、本文中の漢字に読み仮名を付ければ音読はできる。	○自分の思いどおりに文字がきれいに書けないと不安になる。特に、授業導入時につまづくと、やる気をなくしてしまうことが多い。	○クイズが好きで、クイズを出すときと真剣に考えて答える。
解 釈		学習に少しでもつまづくと気持ちが不安定になり、学習に注意が向かなくなる。	短い時間の中で文字を書くことを意識しすぎると、焦りから不安定になるものと考えられる。	クイズ形式の問題を解くことにより、注意が持続するとともに、考えやすくなる。
関 連		①注意集中③同時処理	①注意集中③同時処理	①注意集中②プランニング
支 援	ポ イ ン ト	音読の場所が一目で見分けるようにする必要がある。そのために、読めない漢字やページのめくりそこないで注意集中が途切れないように、すぐに読んでいる場所が分かり、落ち着いて本文に戻れるようにする。	書くことに負担がなくなると不安がなくなり、学習に集中でき、じっくりと考えられる。特に、授業にスムーズに入れるようにし、意欲を持続させる必要がある。そこで、初めから学習につまづかないようにするとともに、認める場面を設けるようにする。	本児の注意を持続させるため、興味・関心のもてるワークシートを作成する必要がある。そこで、本児の好きなクイズ形式でワークシートの問題を作成し、本児のペースで学習を進められるようにする。

支 援	内 容	漢字に読み仮名を付け、教科書のページ分を一枚の紙につなげ、学習部分が一目で視覚に入るように折り、クリップで留めた教材文	キャプション（写真の説明）を書いた付せん紙	本児用クイズ形式ワークシート
授 業 の 様 子		読み仮名付き教材文を使いながら音読したところ、皆の音読ペースに合わせて音読することができた。一目で音読箇所が見渡せる一枚の教材文で、読んでいる場所が分からなくなることがなかった。	写真から情報を読み取り、ワークシート上で写真と付せん紙に書かれたキャプションをすぐに一致させることができた。笑顔が見られた。さらに、代表で前に出て、黒板にはってある写真と一致するキャプションを選び、正解であることを皆に認められると、さらにうれしそうにしていた。	学級全体用と本児用の2種類から自分に合ったワークシートを選ばせたところ、クイズ形式のワークシートを選んだ。第一問は指導者から出したヒントで答えを書き出した。つまりくことなく、最後の問題まで、しっかりとした字でワークシートに答えを書き、発表することができた。
考 察		視覚から入る余分な情報は思考の妨げになる。学習意欲のある本児にとっては、教材文で読み仮名が確認できたり、教材文を本時の学習箇所のみ見られるようにしたりしたことで、集中できる環境が整い、落ち着いて学習に取り組めたと考える。	授業の初めに、活躍場面を作ることで、一時間の授業の取組が違う。短時間で書くことが苦手な本児の実態から、あらかじめ指導者が付せん紙にキャプションを書いておくことで、本児が書くことを必要最小限にとどめた。そのため、負担感が減り、注意集中が持続したと考える。	クイズ形式のワークシートを自分で選び、一問できるごとに「できた。分かった。」という声を指導者に向けた。正解であることを確かめながら問題を解き進めていくうちに、最初は不安そうであった表情が笑顔になった。本児は「クイズ形式であれば問題が解ける」という自信をもって読み取りを進めていき、集中しながら学習に取り組んだ。児童の実態に合ったワークシートを準備することは有効であると考えた。

## イ 考察

### (ア) 児童について

内容の読み取りのワークシートは、2種類用意した。一つは本文と写真を手掛かりに読み取るもの、もう一つは、読み取る内容を本文と写真を手掛かりにクイズ形式にしたものである。2種類のワークシートのどちらを使ってもよいことを児童に伝えたところ、本児を含む13人の児童は後者を選んだ。

参観者からは、次のような意見があった。

- 本児の座席を一番前にしたことで、指導者とのコミュニケーションが取れ、落ち着いて学習に取り組めた。
- 本児のために用意したクイズ形式のワークシートは、他の児童も自分から進んで使い、読み取りの手だてとして有効であった。

- キャプションを書いた付せん紙を用意し書く負担感を減らしたことで、本児に余裕が生まれた。また、黒板に写真と照らし合わせてキャプションを正しくはり、活躍の場があったことが学習意欲につながった。

また、「授業評価の視点」では、本児への支援として考えた「漢字に読み仮名を付け教科書のページ分を一枚の紙につなげ、学習部分が視覚に入るように折り、クリップで留めた教材文」「キャプションを書いた付せん紙」「本児用クイズ形式ワークシート」もう一人の特別な支援が必要な児童への支援として考えた「内容のまとめりごとに5枚のシートに切ったワークシート」は、A評価であった。

学級全体の児童からは、次のような感想があった。

- ワークシートが一つだけでなく、自分に合ったワークシートを選んでよかった。
- 読み仮名付きのプリントがあってよかった。
- 文字盤に粘着ブロックをはった時計があったので、いつまで書いていてよいか分かった。

#### (1) 授業全体について

特別な支援が必要な児童が、学習につまずいて不安になると、学級全体に影響することがある。そこで、本児のもつ学習意欲の高さに着目し、本児が困らないように読み仮名付きのプリントや付せん紙を使って支援した。このことにより、本児は授業中落ち着いていられ、学習意欲が持続した。静かで考えを集中できる環境にあったため、学級全体の児童も学習への注意集中が持続した。

また、特別な支援が必要な児童に用意したプリントやワークシートは、学級の半数ほどの児童が「利用した。」と感想に書いていたことから、他の児童にも有効であったと考える。

## VI まとめと今後の課題

### 1 まとめ

特別な支援が必要な児童にとっての分かりやすい授業づくりについて、授業実践の結果をもとに以下の三点から述べる。

#### ○ 「個別の指導計画」の作成と活用

授業実践に当たり、特別な支援が必要な児童一人一人の「個別の指導計画」を作成した。「個別の指導計画」は学年ごとに作成され、①様々な観点から児童の実態を把握する、②長期・短期目標を立てる、③支援の方法を考える、④実践する、⑤評価する、という一連のサイクルを繰り返しながら、学期ごとに修正していくものである。

今回の授業実践では、「個別の指導計画」は、担任・学校支援員・特別支援教育コーディネーター・校内委員会の構成メンバーからの聞き取り、話合い、指導者の授業観察をもとに作成した。「個別の指導計画」を作成したことで、指導者・担任・学年主任が対象児童の特性を把握でき、共通理解しながら個々の児童に合った分かりやすい授業を実践できた。担任が変わっても、「個別の指導計画」で情報をつなげていくことが大切である。

#### ○ 認知処理様式に着目した支援

今まで、自分で行ってきた指導は、認知処理様式に着目した授業構成の視点をもたない授業であった。そのため、一様に繰り返しやスモールステップでの指導など、学級全体に同じ手だてで対応

してきた。しかし、児童によっては思ったほどの学習効果が得られないことがあった。

今回、自分が初めて特別支援教育を研究してみると、特別な支援が必要な児童の中には、個々の認知処理の特性に応じた支援を考えていかなければ学習はなかなか定着しない児童がいることが分かった。国語の授業実践では、詩をつくった。書くことをおっくうがる本児には、同時処理の優位性を生かして、得意とする絵に詩のイメージを表してから詩に表現する支援を考えた。すると、何の抵抗もなく自分のイメージを絵から詩に表現することができた。また、注意集中を促したりプランニングの力を補ったりする視点として、学習環境への配慮も重要であった。例えば、前時までの学習内容がまとめられてある模造紙が順序良く掲示され、必要に応じて見に行ける環境、特別な支援が必要な児童が落ち着いて学習できる座席の位置、作業を伴うために必要な広い教室スペースと広い机の使用などである。

認知処理様式から考えた授業構成の4つの視点は、特別な支援が必要な児童の実態に即した、分かりやすい負担感の少ない授業を実現すると言える。なぜなら、今回の授業実践で対象となった特別な支援が必要な児童からは、各授業とも「勉強が楽しかった。勉強が分かりやすかった。」という感想が多く、また、各授業における個々のねらいが達成できたからである。

\*授業実践の中で有効であった支援をまとめると次ページの表3のとおりになる。

#### ○ 特別な支援が必要な児童への支援と他の児童への支援

特別な支援が必要な児童への支援は、解決のモデルやヒントを示したり、視覚的・運動的な手掛かりを重視したり、言語的・聴覚的な手掛かりを重視したりする丁寧な支援である。例えば、国語の授業実践では、ワークシートを特別な支援が必要な児童の実態に合わせて学級全体用、個別用を2種類の計3種類準備したところ、学級の半数近くの児童が、個別用ワークシートを使った。また、詩の題材を集めるために、休み時間に対象児童と題材を探しに校庭へ出かけてデジタルカメラに写した写真は、他の児童が題材を考える一つの素材となった。さらに「相談コーナー」の設置は、特別な支援が必要な児童が困ったときに気軽に利用できるコーナーとして設置したが、だれでも困ったときには、解決のヒントを得られる場所となった。特別な支援が必要な児童に、一人だけ集中指



**表3 【授業実践において成果のあった支援一覧】**

視 点	分 類	具 体 的 な 支 援 内 容
①注意集中を促す	教室環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特別教室の利用 [図書室、多目的教室]</li> <li>・相談コーナーの設置*②とも関連</li> <li>・座席の位置</li> <li>・扇形の机配置</li> <li>・補助機の活用</li> <li>・キャプションを書いた付せん紙*③とも関連</li> </ul>
	教材・教具	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートの拡大版を黒板に示した工夫</li> <li>・漢字に読み仮名を付け、教科書のページ分を一枚の紙につなげ、学習部分が一目で視覚に入るように折り、クリップで留めた教材文*③とも関連</li> <li>・クイズ形式ワークシート*②とも関連</li> <li>・ます目入り位別色分けワークシート*③とも関連</li> </ul>
②プランニングの力を補う	教材・教具	<ul style="list-style-type: none"> <li>・付せん紙の活用</li> <li>・毎時間同じパターンで示した板書内容とワークシート</li> <li>・問題数を自分で選ぶワークシート</li> <li>・計算の見積りをするためのプリント</li> </ul>
	教室環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時までの学習内容がまとめてある模造紙の掲示</li> </ul>
③同時処理の優位性を生かす	教材・教具	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵を描いてから詩に表現する形式のワークシート</li> <li>・詩の題材選びにデジタルカメラで撮った写真を活用</li> <li>・直角を確認した後にはるシール</li> </ul>
	教室環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の目当て、流れの掲示</li> <li>・粘着ブロックをはった時計の活用</li> </ul>
④継次処理の優位性を生かす	教材・教具	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作業工程を分割して一枚ずつの絵で示す</li> <li>・内容のまとめりごとに5枚のシートに切ったワークシート</li> </ul>
	発問	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クイズ形式の発問</li> </ul>
その他	教材・教具	<ul style="list-style-type: none"> <li>・滑り止めをはった三角定規</li> <li>・両面印刷プリント〈片面のみ漢字読み仮名付き〉</li> </ul>

導をする、一人だけ違うワークシートやプリントを用意することなく、個を尊重しながら支援することができた。他の児童から見ても、特別視を生じさせないで済んだ。指導者の少しの手間と工夫で、様々な児童のもつ学習の困難さに対応できるよう授業構成をすることが大切である。

教科である体育科、音楽科、図画工作科での授業実践は、国語科や算数科の支援とは異なった支援を工夫していかなければならないと考える。

## 2 課題

今回の授業実践は、国語科と算数科の2教科で行ったものである。教師は、全教科・領域において特別な支援が必要な児童にとって分かりやすい授業を保障していく責任がある。したがって、今後は、4つの認知処理様式をもとに、全教科・領域で授業を実践していく必要がある。特に、技能